

要旨

改まりの度合いが高い日本語 (formal Japanese; FJ) では、項名詞句はガ、ヲ、ハなど何らかの助詞を義務的に伴う。一方、くだけた使用域で用いられる日本語 (colloquial Japanese; CJ) においては、無助詞の項名詞句が生起しうる。無助詞は多くの場合ガ・ヲあるいはハと随意的に交替可能だが、一方が強く選好される、あるいは義務的となる場合もある。本発表では CJ における無助詞項名詞句の認可・選好に関わる意味的・語用論的条件を考察する。ハ標示と無助詞 (ゼロ標示) の交替に関しては、対比性および既出性が主要な要因となることを論じる。また、格助詞と無助詞 (無形格) の交替に関しても、一方の選好につながる条件をいくつか指摘する。付加詞に対するハ標示についても言及する。

1. はじめに: 日本語の無助詞項名詞句

- 日本語では、改まりの度合いが高い場合、項名詞句はガ、ヲ、ハなど何らかの助詞を義務的に伴う。
 - 一方、くだけた使用域 (文体・話体) においては、無助詞の項名詞句が生起しうる (例:「山田さん (は/が) そろそろ来るよ」「ラーメン (を) 食べた」)。
 - 「無助詞」は多くの場合ガ・ヲあるいはハと随意的に交替可能だが、一方が強く選好される、あるいは義務的となる場合もある (丹羽 1989, 加藤 1997, 荻宿 2014 等)。
- (1)
- a. (壁にかかっている時計を指さして) あれっ、あの時計 {#/が/??は/Ø} 止まってるよ。
 - b. (ケンってどんな人? →) あいつ {#/が/は/??Ø} かなり真面目なやつだよ。
 - c. (昼ごはんはどうしたの? →) ラーメン {を/#は/??Ø} 学食で食べた。
- 本発表では無助詞項名詞句の認可・選好に関わる意味的・語用論的条件を考察する。
 - ・ ガ格・ヲ格の主語・目的語を中心に検討するが、ニ格項ならびに付加詞 (随意補部) についてもとりあげる。

2. 改まりの度合いの高い使用域におけるハ標示

- Oshima (2021) では、改まりの度合いの高い使用域におけるハ (いわゆる「主題用法」のもの¹) の生起条件に関して、概略 (2) のような原則が提案されている。
- (2) **ハ標示原則 (項に対するハ標示の原則):** α を、任意の主節における、非焦点でありなおかつ明示的に現れる項とする。 α は、以下の条件 (a)・(b) の少なくとも一方が充足されている場合 (またその場合に限り) ハ標示を受ける。
- (a) α の姉妹項の中に、(i) 非焦点要素であり、(ii) 明示的に現れ、なおかつ (iii) α より斜格性 (obliqueness)² の低いものが存在しない。
 - (b) α が対比主題 (Büring 2003) である。
- ただし、音調的に α が焦点後方抑制 (postfocal reduction) の範囲に現れる場合には、ハ標示は随意的である。

¹ 「(大)主語 (< 小主語) < ニ格目的語 < {ヲ格目的語/ガ格目的語}」という斜格性階層 (obliqueness hierarchy; Pollard & Sag 1994) が想定されている。

² 焦点要素と結びつくいわゆる「対比用法」のハについては Oshima (2020) を参照。

○ ハ標示原則は、例えば (3)–(6) におけるハおよび格助詞の選択可能性を、「アバウトネス主題」といった客観的な規定が困難な概念を用いることなく) 説明することができる。

(3) (山田・鈴木・佐藤という 3 人の学生が、読書課題としてそれぞれ作品を選んだ。山田は『雪国』を読んだ。鈴木は『こころ』を読んだ。佐藤は『羅生門』を読んだ。)

A: 山田くんが『雪国』を読んだのはいつですか。

B_a: 山田くん {#が/は} 『雪国』 {を/#は} [F 先週] 読みました。

B_b: [F 先週] 山田くん {が/は} 『雪国』 {を/#は} 読みました。

(4) (山田・鈴木・佐藤という 3 人の学生が、読書課題として『雪国』・『こころ』・『羅生門』の 3 作品を読んだ。)

A: 山田くんが『雪国』を読んだのはいつですか。

B: 山田くん {#が/は} 『雪国』 {を/#は} [F 先週] 読みました。

(5) あれは、北川さんがやったんじゃない。北川さんがやれるはずはないんだ。
だって、だって社長 {は/#を}, [F 僕が] 殺したんだもの! (島田荘司・著『数字錠』より)

(6) (ユミがチケットを買ったのはどこですか? —)

a. ユミ {は/#が} チケット {?は/を} [F 東京ドームで] 買ったようです。

b. チケット {は/#を} [F 東京ドームで] 買ったようです。

○ 例 (3)–(6) における項構造と (非) 焦点性は以下の通り (F = 焦点要素/G = 非焦点 (ground) 要素)。下線名詞句がハ標示の対象となる。

(3B_{a,b})/(4B): <山田くん_G, 雪国_G>

(5): <僕_F, 社長_G>

(6a): <ユミ_G, チケット_G>

(6b): <pro_G, チケット_G>

・ (3B_b) で主語に対するハ標示が随意的なのは、焦点後方抑制の影響。

・ (4B) で目的語に対するハ標示が可能なのは、対比主題性による。

○ 日常的な話し言葉 (colloquial Japanese; CJ) における無助詞項名詞句の分布の適切な記述のためには、以下の 2 つを分別することが必要であると考えられる。

・ 「改まりの度合いが高い言葉 (formal Japanese; FJ) であればハ標示の対象となる項名詞句」が無助詞で現れる場合 ⇒ **ゼロ標示** (zero-marking)

(長谷川 (1993) における「独自の機能を持つ Ø」, 荻宿 (2014) における「無助詞名詞」に相当)

・ 「FJ であれば格助詞標示の対象となる (= ハ標示の対象とならない) 項名詞句」が無助詞で現れる場合 ⇒ **無形格** (null case)

(長谷川 (1993) における「単なる格助詞の省略」, 荻宿 (2014) における「助詞省略名詞」に相当)

3. 改まりの度合いの低い使用域におけるハ/ゼロ標示

○ CJ におけるガ/ヲ格項に関して、本発表では原則 (7) を提案する。

・ **重要な帰結**: CJ におけるハ標示は、FJ の場合と異なり、既出性または (比較的弱い意味での) 対比性を伝達する。

- (7) **ハ/ゼロ標示原則 (ガ/ヲ格項に対するハ/ゼロ標示の原則):** α を、任意の主節における、非焦点でありなおかつ明示的に現れるガ/ヲ格項とする。
- (a) α が (i) 対比主題であるか、または (ii) 対比項目であり、姉妹項の中に、(1) 非焦点であり、(2) 明示的に現れ、なおかつ (3) α より斜格性の低いものが存在しない場合、 α はハ標示を受ける (ゼロ標示は許容されない)。
- (b) α が対比項目でなく、当該の談話内で既出の事物を指示し、かつ姉妹項の中に、(i) 非焦点であり、(ii) 明示的に現れ、なおかつ (iii) α より斜格性の低いものが存在しない場合、 α はハ標示またはゼロ標示のいずれかを受ける (ハと \emptyset の交替が可能である)。
- (c) α が対比項目でなく、当該の談話内で未出の事物を指示し、かつ姉妹項の中に、(i) 非焦点であり、(ii) 明示的に現れ、なおかつ (iii) α より斜格性の低いものが存在しない場合、 α はゼロ標示を受ける (ハ標示は許容されない)。
- ただし、音調的に α が焦点後方抑制 (postfocal reduction) の範囲に現れる場合には、ハ/ゼロ標示は随意的である。
- 「対比項目 (contrast item; [+CI])」とは「対比主題 (contrastive topic; [+CT])」よりも弱い概念であり「発話内で何らかの属性 P を付与され、なおかつ何らかの同種の事物 a に対して P と類比的な何らかの属性 P' を適用することによって得られる命題 P'(a) が当該談話内で既に想起された、あるいは想起される見込みが高い事物を指示する表現」を指す。([+CT] の表現は必然的に [+CI] である。)
- 「特徴づけ」の対象となる個体や種を指す名詞句 (“What’s X like?” に類する問いおよびそれに対する答えにおける X) は概して [+CI] であると捉える。
- 「対比主題」「対比項目」は、structured meaning semantics (Krifka 2001 等を参照) の枠組みを用いて (8)/(9) のように定義することができる。
- ここで、文の指示対象は、背景 (ground), 焦点 (focus), 制限 (restriction) の順序組: $\langle \mathbf{G}(\mathbf{round}), \mathbf{F}(\mathbf{ocus}), \mathbf{R}(\mathbf{estriction}) \rangle$ のかたちで表象される。平叙文の場合 R は空集合; 疑問詞疑問文の場合 R は疑問詞の領域に相当する集合 (例えば *Who came?* の場合 $\mathbf{R} = \{\mathbf{john}, \mathbf{mary}, \dots\}$); 極性疑問文の場合 R は極性を元とする集合。
- (8) **Contrastive Topic (CT):** Item X in $[_s \dots X \dots]$ is [+CT] iff:
 $[[S]]$ addresses or denotes question Q such that $Q = \langle \alpha([\![X]\!]), \mathbf{NULL}, \pi \rangle$, and the QUD stack (in Roberts’s 2012 sense) contains a superquestion of Q, Q' , such that there is at least one object β such that (i) $\beta \in \mathbf{ALT}([\![X]\!])$ and $\beta \neq [\![X]\!]$ and (ii) $\langle \alpha(\beta), \mathbf{NULL}, \pi \rangle$ is a sister subquestion of Q with respect to Q' .
- (9) **Contrast Item (CI):** Item X in $[_s \dots X \dots]$ is [+CI] iff:
- (a) $[[S]] = \langle \alpha([\![X]\!]), \gamma, \emptyset \rangle$ where $\gamma \neq \mathbf{NULL}$ and there is at least one object β such that (i) $\beta \in \mathbf{ALT}([\![X]\!])$ and $\beta \neq [\![X]\!]$, and (ii) some proposition p such that $p = \langle \alpha(\beta), \gamma', \emptyset \rangle$ where $\gamma' \in \mathbf{ALT}(\gamma)$ has been evoked, or it is plausible that such a proposition is to be evoked, in the current discourse; or
- (b) $[[S]] = \langle \alpha([\![X]\!]), \mathbf{NULL}, \pi \rangle$ where $\pi \neq \emptyset$ and there is at least one object β such that (i) $\beta \in \mathbf{ALT}([\![X]\!])$ and $\beta \neq [\![X]\!]$, and (ii) some proposition p such that p is congruent to $\langle \alpha(\beta), \mathbf{NULL}, \pi \rangle$ has been evoked, or it is plausible that such a proposition is to be evoked, in the current discourse.
- 「未出」であるという性質は、Prince (1992) における “discourse-new” に近い。ただし、談話の場面に存

在することが認識されている事物（話し手など）が自動的に“discourse-old”となるのに対し、「既出」となるのは明示的に言及された事物に限られる。「未出」の事物を指示する名詞句を [+FM] (first mention), 「既出」の事物を指示する名詞句を [-FM] と表記する。

- 既出性とハの使用の関わりについては丹羽 (1989), 菊地 (2006) 等でも言及されている。

○ ハ/ゼロ標示原則は、例えば (10a-c) におけるハ標示, ゼロ標示, 格助詞の選択可能性を説明することができる。

- (10) a. (壁にかかっている時計を指さして) あれっ, [あの時計]_[-CI, +FM] {#が/??は/∅} 止まってるよ。
 b. (食事の際, 最初に味噌汁を一口飲んで) [味噌汁]_[-CI, +FM] {??が/??は/∅} おいしい。
 c. (ケンってどんな人? →) [あいつ]_[+CI, -FM] {#が/は/??∅} かなり真面目なやつだよ。
 d. (電話で) ねえ, [山田さん]_[-CI, +FM] {#が/??は/∅} そこにいる? →
 ええと……うん, [山田さん]_[-CI, -FM] {#が/は/∅} まだいるよ。
 e. (ホテルを予約したのは誰? →)
 i. [ホテル]_[±CI, -FM] {#/は/∅} [F 鈴木さんが] 予約した。
 ii. [F 鈴木さんが] [ホテル]_[±CI, -FM] {#/は/∅} 予約した。

3.1. 文のムードとゼロ標示

○ 質問文 (特に存在や能力を問うもの) にあらわれる明示的な項名詞句は, 無助詞で現れる場合が多い (尾上 1987; 例 (10d) も参照)。

(11) ナイフある? / 富士山見える? / ロシア語読める?

- これは, このような条件を満たす項名詞句は [-CI, +FM] という条件を満たす蓋然性が高いことに由来すると考えられる。

3.2. 対比性と待遇効果

○ 1 人称指示名詞句に関して, 菊地 (2006:5-7) は話し手と聞き手の上下関係によって無助詞の選好が影響されることを指摘している。

- (12) a. (部下から上司に) あの, わたし {?は/∅} 今日午後から〇〇へ出かけますので, 留守中何かありましたらよろしくお願いします。
 b. (上司から部下に) ぼく {は/∅} 今日午後から〇〇へ出かけるので, 留守中何かあったらよろしく頼むよ。

- 1 人称主語が [+FM] の場合, ハの使用は対比項目性を伝達する。この場合, 聞き手が, 話し手が対比される対象として捉えられやすい。その結果, 聞き手の属性や行為についても何らかの言及がなされるべきであるという含みが生じる (「わたしは出かけるが, あなたはどうか」)。
- 目下の人物が目上の人物の属性や行為について照会することは, フェイスの侵害行為となりうる。これが, 目下の人物が 1 人称指示に際してゼロ標示を選好することの原因であると考えられる。

4. 無形格 (格助詞脱落)

○ ハ/ゼロ標示原則の対象とならない項名詞句 (典型的には焦点要素) における格助詞の保持・脱落は多くの場合随意的である。また, 保持または脱落の選好度は, 改まりの度合い, 名詞句の予測可能性, 名詞句の音韻的特徴など様々な要因によって影響される (丹羽 1989, 菊宿 2014 など)。

○ 一方、一定の条件下では、無形格（格助詞脱落）の容認度は大きく下がる。

①（ハ/ゼロ標示原則の対象とならない）項名詞句が焦点（の一部）であり、なおかつ述語に隣接しない位置に生起する場合。

- (13) a. (昼ご飯はどうしたの? →) [F 学食で] [F ラーメン {を/∅}] 食べた。
b. (昼ご飯はどうしたの? →) [F ラーメン {を/??∅}] [F 学食で] 食べた。

- (14) a. (昨日は何か変わったことした? →) [F 新宿で映画 {を/∅}] 見た。
b. (昨日は何か変わったことした? →) [F 映画 {を/??∅}] 新宿で見た。

②（ハ/ゼロ標示原則の対象とならない）ガ格主語が狭い焦点（narrow focus）である場合（高見・久野 2006:204）。

- (15) a. (どうしたの? →) [F コップ {が/∅}] 割れた。
b. (何が割れたの? →) [F コップ {が/??∅}] 割れた。

・ 目的語が狭い焦点の場合、格助詞脱落の選好度は下がるものの、影響は限定的である（cf. 加藤 1997:66–71）。

- (16) (何を食べたの? うどん? →) いや [F ラーメン {を/(?)∅}] 食べた。

③（ハ/ゼロ標示原則の対象とならない）ガ格主語が ACTOR 役割を担う（非能格自動詞または典型的な他動詞の主語である）場合（影山 1993:56–57）。

- (17) a. さっき池下公園に小学生 {が/∅} いた。
b. さっき池下公園で小学生 {が/??∅} {遊んでた/騒いでた}。

- (18) (このサラダ, どうしたの? →) これは山田くん {が/??∅} 作った。

○ 無形格の選択が強く選好されるケースもある。

①（ハ/ゼロ標示原則の対象とならない）項名詞句が非焦点要素の場合。

- (19) A: 昨日ネットフリックスで『レ・ミゼラブル』っていう映画見た。B さんは見たことある?
B: 俺 (は) [G あの映画 {??を/∅}] 去年映画館で見た。

②（ハ/ゼロ標示原則の対象とならない）ヲ格目的語が「X_{ACC} V-ル(カ)?」の形式を持ち、話し手が聞き手に X を提供する意思を示す構文に生起する場合

- (20) a. (ちょっと喉が乾いたな。 →) ビール {??を/∅} {飲む/飲みますか}?
b. (暇だな。 →) テレビ {??を/∅} {見る/見ますか}?

・ 焦点要素に対する明示的格標示が完全に不適格になるのは、「提供構文」に特有の現象であると考えられる。

- (21) a. (ちょっと喉が乾いたな。 →) ビール {を/∅} {飲もう/飲みましょう}?
b. (暇だな。 →) テレビ {を/∅} {見よう/見ましょう}。

- (22) (何してたの? →) テレビ {を/∅} 見てた。

5. 二格項の無助詞化

○ ニ格項は一般に無助詞を許容しにくい。

- (23) a. 山田さんに (は) ネクタイ {を/∅} あげた。
b. ネクタイ {を/は} 山田さん {に/#∅} あげた。

- (24) a. あのネクタイ {は/∅}, 山田さんにあげた。
b. 山田さん {には/??∅}, あのネクタイをあげた。

○ しかし、一部のニ格項は無助詞で生起することがある (丹羽 1989, 加藤 1997)。

A 類: 「あげる」「渡す」「伝える」等の 3 項述語の受領者 (RECIPIENT) 項 ⇒ 無助詞不可

B₁ 類: 「合格する」「会う」等の 2 項述語のニ格目的語³ ⇒ ゼロ標示のみ可

B₂ 類: 「行く」「来る」「入る」「着く」等の移動動詞の着点 (GOAL) 項 ⇒ ゼロ標示・無形格ともに可

5.1 B 類ニ格項に対するゼロ標示

○ B 類ニ格項には、ガ/ヲ格項と同様に「ハ/ゼロ標示原則」が適用される。

- ・ ガ/ヲ格項がハ標示を受け「β_{NOM/ACC} ハ」になる場合 ⇒ 「α_{DAT} (ニ) ハ」 (ニは随意的に脱落)
- ・ ガ/ヲ格項がゼロ標示を受け「β_{NOM/ACC} ∅」になる場合 ⇒ 「α_{DAT} ∅」

- (25) a. 東京 {(に) は/∅} 来週も行くよ。
b. 山田さん {(に) は/∅} この前会ったよ。
c. 追試験 {(に) は/∅} なんとか合格したよ。

5.2 B₂ 類ニ格項の無形格化

○ 格助詞脱落 (無形格との交替) を許容するのは、B 類ニ格項のうちの一部 (B₂ 類) に限られる。

- (26) a. (ヒロシはどこ? →) 図書館 {に/∅} 行ってる。
b. もう駅 {に/∅} 着いたよ。
- (27) a. (会場に誰か知ってる人いた? →) ユミ {に/??∅} 会ったよ。
b. (最近英語の勉強がんばってるんだって? →) うん。この前英検 1 級 {に/??∅} 合格したよ。

6. 付加詞に対するハ標示

○ Oshima (2021:334–337) では、(FJ における) 付加詞 (デ格場所修飾句など) に対するハ標示について、以下の指摘がなされている。

- ・ 付加詞が非焦点要素であっても、ハ標示の対象になるとは限らない。

- (28) A: 明日、名古屋で何か面白いイベントはありますか。
B: 芸術劇場で若手のピアニストがプロコフィエフのピアノ協奏曲 2 番を演奏します。
A: もう少しくわしく教えてください。
B: はい、わかりました。芸術劇場で (??は) 小林というピアニストが 2 番を演奏します。オケは名古屋フィルです。

- ・ ハ標示の対象になる付加詞は、対比主題には限られない。

³ 「対戦する」等のト格目的語も、B₁ 類ニ格項に類似した振る舞いを見せる (「あの人 {(と) は/∅} 先週対戦したよ」)。

(29) (車はどこにとめたの? →) いや, 今日 {は/?Ø} 地下鉄で来た。

(30) (旅先で, 観光客向けのパンフレットを見ながら)

この地域で {は/?Ø} 正月にさんまの寿司を食べるんだって。

○ FJ・CJ を通じて, 付加詞に対するハ標示は原則 (31) に従うと考えられる。

- 対比項目性 (弱い意味での対比性) は, 「CJ における項名詞句に対するハ標示」だけでなく, 「FJ・CJ の両方における付加詞に対するハ標示」においても重要な条件となる。

(31) **付加詞に対するハ標示の原則:** α を, 任意の主節における非焦点の付加詞とする。 α は, 対比項目 ([+CI]) である場合 (またその場合に限り) ハ標示を受ける。

8. おわりに

○ 以上, CJ において「ゼロ標示」がハ標示のかわりに用いられる条件, ならびに「無形格」が格助詞標示のかわりに用いられる条件を考察した。

○ 先行研究において, 助詞ハは「ある種の対比性」および「話題の連続性 (topic continuity)」を伝達するはたらしを持つという認識が広く持たれてきた。これは「部分的に正しい」。

- ハ標示がゼロ標示と対立する CJ においては, 「ガ/ヲ格項名詞句および一部のニ格項名詞句」に対するハ標示は, 当該名詞句が (a) 対比項目である, (b) 既出の事物を指すという 2 つの性質のうち少なくとも 1 つを有するという情報を伝達する。
- CJ・FJ を通じて, 付加詞に対するハ標示は, 当該表現が対比項目であるという情報を伝達する。

参考文献

尾上圭介 (1987) 「主語に「は」も「が」も使えない文について」(国語学会研究発表会発表要旨)『国語学』150:48;
影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房; 加藤重弘 (1997)「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27:19–82; 荻宿紀子 (2014)「「無助詞」研究の現状と課題」『早稲田大学教育・総合科学学術院学術研究 (人文科学・社会科学編)』62:147–162; 菊地康人 (2006)「主題のハと, いわゆる主題性の無助詞」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編)『日本語文法の新地平 2 文論編』くろしお出版. pp.1–26; 高見健一・久野暉 (2006)『日本語機能的構文研究』大修館書店; 丹羽哲也 (1989)「無助詞格の機能—主題と格と語順—」『国語国文』58(10):38–57; 長谷川ユリ (1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80:158–168; Büring, Daniel (2003) “On D-trees, beans, and B-accent”, *Linguistics and Philosophy* 26:511–545; Krifka, Manfred (2001) “For a structured meaning account of questions and answers”, Caroline Féry & Wolfgang Sternefeld (eds.) *Audiatur vox sapientiae: A Festschrift for Arnim von Stechow*. Akademie Verlag. pp.287–319; Oshima, David Y. (2020) “The English rise-fall-rise contour and the Japanese contrastive particle *wa*: A uniform account”, Shin Fukuda, Shoichi Iwasaki, Sun-Ah Jun, Sung-Ock Sohn, Susan Strauss & Kie Zuraw (eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, vol.26. CSLI Publications. pp.165–175; Oshima, David Y. (2021) “When (not) to use the Japanese particle *wa*: Groundhood, contrastive topics, and grammatical functions”, *Language: A Journal of the Linguistic Society of America* 97:e320–340; Pollard, Carl & Ivan A. Sag (1994) *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. University of Chicago Press; Prince, Ellen F. (1992) “The ZPG Letter: Subjects, definiteness, and information-status”, William C. Mann & Sandra A. Thompson (eds.) *Discourse description: Diverse linguistic analyses of a fund-raising text*. John Benjamins. pp.295–325; Roberts, Craige (2012) “Information structure in discourse: Towards an integrated formal theory of pragmatics”, *Semantics and Pragmatics* 1, Article 6:1–69.